

韓国日記

6・10 少し遅くなったのでスカイライナーに乗り、9:10、第2ターミナル着。全日空 NH937便は、10:15、定時離陸。和食の昼食で、ワインはフリー。アジア路線はまだ楽しめる。2時間ほどで仁川国際空港に着陸。大きくてきれいな空港だ。成田同様、あまり客は多くない。入国の前に携帯品とボディ・チェックがあったのには驚いた。飛行機の窓からの機外撮影や、空港内の撮影も禁止されている。北朝鮮との緊迫した関係がまだ続いているという印象だ。

まず、両替をする。1円 = 9.85W で、札束を持った気分になる。次に、インフォメーションで地図・パンフレットをもらって、3階レストランで冷麺を食べながら、おおよそのソウル地図イメージをつくる。冷麺に鉄がついてきたのでウェイターの顔を見ると、笑って麺を短く切ってくれた。原型はすごく長いらしい。

ホテル案内で、ソウル中心部の安いホテルを頼む。日本語より英語のほうが通じた。明洞のプリンス・ホテルを予約して、道順までプリントアウトした予約書をくれた。インフォメーションに戻って、板門店ツアを予約する。明日のツアが取れた。

空港バスでホテルに向かう。仁川島内は緩やかな丘陵の合間に田植えが済んだ棚田状の田んぼや唐辛子畑が続く。本土に渡るあたりは、干拓中なのか、乾きかけた土地に、アッケシソウのような赤い草が生えている。本土に入ると、田は区画整理されて行儀よく並び、栗や果樹の林がある。

1950年には、アメリカ軍はどのあたりに再上陸したのだろうかと思いながら海岸沿いを走り、やがて漢江を渡る。かなり川幅は広く、江上には遊覧船、モーターボート、ナックルフォーなど、岸では、投げ釣りをする人、河川敷にはネギか唐辛子の畑。

漢江沿いに走るが、ほどなく道路は渋滞してノロノロ運転になる。左ハンドル車が右側通行。道路標識はほとんどがハングル表記で、漢字・ローマ字はきわめて少ない。この国では、レンタカーで走るのは無理だ。約1時間半かかって、ホテル近くのバス停に着いた。街中の道路表示もハングルで、地図を持っていないと現在地確認不能だ。地下道で道の反対側に渡り、ホテルへ到着。こじんまりしたホテルで、狭いベッドのツインルーム。バスタブは深い。朝食なしで@90000W。板門店ツアはロッテ・ホテル3階集合なので場所の確認がてら、明洞散歩に出る。小さなビルが並び、露店も出ている繁華街で、ちょうど昔の池袋の西口のような雰囲気だ。衣料品・靴・かばんなどの店や、韓国料理・和食・ハンバーガーなどの飲食店が並ぶ。

ロッテ・デパートの地下食品売り場は、キムチ・韓国のり・海産乾物・明太子・韓国味噌などの山。牛肉は安い、豚肉は日本並。鮮魚も安くはない。イシモチの干物が、10匹で10万円の値段でビックリした。小さいイシモチでも20匹で5000円。美味しいのだろうか。青果物では、すいか・オレンジ・青菜ものは安い、アボガド・マンゴー・カリフラワー・ブロッコリーは高め。デパート値段だが、まあ全体的には食料品は日本よりかなり安そうだ。

ロッテ・ホテル3階の旅行社を確認してから、南大門市場へ歩く。ここの街の建物には趣がない。古風な建物があるので行ってみると、旧韓国銀行本店、つまり、朝鮮銀行本店で、1912年に辰野金吾設計で建てられたものだった。朝鮮戦争で破壊されたが、再建され、今は博物館になっている。かつての日本支配と南北の戦争を象徴する建物だ。

南大門市場は、衣料品・靴・時計・眼鏡などの小店・露店であふれかえっていた。かばん屋の前を通るとさかんに客引きをして、ローレックスの本物もあるという。らでん店を覗くと小物から高級家具まで並んでいる。いつか、池袋駅の中の物産販売で買った文庫箱は、高い買い物だったことがわかった。

明洞に戻って蔘鶏湯で夕食。1人前 10000W を二人で堪能。薬膳だが美味しい。オリエンタル社の OB ビールもまあまあだ。2階から見下ろす街の風景は日本と変わらない。手をにぎり合う2人連れや学校帰りの制服の女子学生、オシャレをした OL たち、仕事を終えたサラリーマン。体格も顔立ちも同じようだから、話す言葉を聞かなければ、日本に居るようだ。すこし体形はスリムかもしれない。恵子は、唐辛子のカプサイシン効果だろうと言う。蔘鶏湯に付いてきたキムチや大根漬の赤いところをふき取って食べながらの発言。

マクドナルドで@300W のソフトクリーム、パン屋で@500W のアンパンを買う。この価格比は、日本とは異なる。マックのソフトクリームは、中国でも安かったが、どうしてなのだろう。国による相対価格構成の差異を、原因分析するのは面白そうだ。

部屋に帰ったら、恵子の脚がつった。地下道の昇降が効いたようだ。この街には、主要幹線道路に横断歩道はほとんど無く、かなり深い地下道で道を渡らざるを得ない。エスカレーターはまれで、道路を渡るのは大仕事だ。車椅子リフトもきわめて少ない。老人や身障者には冷たい街だ。これほど、車優位の道路設計は見たことがない。地下道のおかげで、地下商店街はよく発達しているが、歩行者はよくも文句をいわずにいるものだ。

現代自動車の高さんに電話すると、工場見学の段取りを検討中とのことのお話。

6・11 メールを準備していたら、メモリー不足表示が出て、モバイルギアがハングアップしてしまった。やむなく電池をはずしてリセットしたら、ファイルが全部消えてしまった。古いファイルを貯め込んでいたのがまずかった。昨日の日記を書き直す。

南山方向に散歩。急な斜面にアパートや飲食店などが並び、上には女子大や小学校がある。朝食用の饅頭などあるかと思っただが、コンビニしかない。小さな韓食堂はあるが、ちょっと入りにくい。部屋に戻って恵子と近くの Marche で朝食。サンドイッチ・粥・マフィンとヘイゼルナッツコーヒー。10:30、板門店ツアバス発車。50人くらいのグループで日本人が20人ほど。英語と日本語2人のガイドが同乗。交互に、南北分断の歴史を、かなり詳しく話す。当然、日本統治時代にもふれるが、英語解説でも批判的用語は用いないでサラリと語る。

40分くらいで、統一展望台に着く。漢江が臨津江と合流する地点の丘に建てられた大きな施設で、臨津江の向こう側が北朝鮮。今日は霧がかかっているが、晴天なら北朝鮮のショーウインドウ的な村落が見えるとのことで、村を望遠撮影したビデオを見せてくれる。ここの川幅は3.2kmだが、もうすこし上流では最短460mくらいになる。北のスパイが侵入したこともあり、韓国は川岸にフェンスを張って、ところどころに監視所を設けている。脱北者はこないかたずねると、ここから来ると監視兵に射殺されるだろうとのこと。

臨津江沿いを30分ほど遡って、チェックポイントでパスポート検査を受けてから橋を渡り、10分ほどで、国連軍キャンプに着く。アメリカ軍と韓国軍が駐屯して、共同警備区域 Joint Security Area (JSA) の警備と非武装地帯 Demilitarized Zone (DMZ) の防衛にあたっている。DMZ は、北緯38度線上にあるのではなく、1953年の停戦協定で定められた軍事境界線 Military Demarcation Line を中心に、南北2kmずつの幅4kmにわたる地帯で、板門店付近から東は38度線より北に、西は38度線より南にあって、不規則にくねくねした帯状になっている。

キャンプ内の兵員食堂で昼食。サラダ・ソーセージ・牛煮込み・スパゲッティ・マッシュポテト・ピザなどのピュッフェ。兵員食は初めてだ。別棟の記念品売店でピンバッジを買って帽子に付ける。また別棟のブリーフィング室で、パワーポイントを使った説明を受ける。JSA の歴史などだが、満腹の上に薄暗い会場なので2人とも、つい、うとうと。1953年の休戦協定を締結した場所は、現在の JSA のすこし北だったとのこと。

U.S. Army のバスに乗り換えて JSA つまり板門店に向かう。北朝鮮側の道路につながる韓国からの道路、国道 1 号線で、JSA 近くには道路をまたぐ形に作られた緊急遮断装置があり、爆破すると道路が閉鎖されて、北の戦車を 1 時間くらいは食い止められるとのこと。やがて、韓国軍の防衛ラインがあり、2 重のフェンスと地雷原が長く伸びている。そこを越えると、いよいよ非武装地帯だ。

このあたりの DMZ には、南北ひとつずつの村が造られていて、田んぼや畑が広がっている。韓国のは自由村と呼ばれ、500 人ほどが暮らしている。村民には、税金と兵役免除の特典が与えられ、村外移住は自由だが、新規入村は嫁入り以外は認められていない。もともと農地のあった地域であるし、非武装の理念を示す象徴的存在として特例的に建設した村だ。北朝鮮もモデル村を造った。南北 2 村は 1 km くらいしか離れていないが、もちろん交流は無い。南村に韓国旗をかかげる高い鉄塔があるが、北村には、それをはるかに凌ぐ高い鉄塔が立って北朝鮮旗をなびかせている。

共同警備区域、板門店には、中央に軍事停戦委員会本会議場になる平屋とそれにならぶ平屋 4 棟が建つ。それを間に、本会議場を見渡す見学施設として、南には「自由の家」、北には「板門閣」が、豪華さを競い合うように建っている。テレビカメラを備えた監視所も双方に建つ。

「自由の家」を通り抜けて本会議場に入る。中央のテーブルの真中が軍事境界線で、建物の外部には境界線が 30cm 幅のコンクリートの帯で示されている。本会議場の見学には、韓国側からの見学には国連軍兵士が、北朝鮮側からの見学には北朝鮮軍兵士が立ち合い、双方が同時にはぶつからない仕組みになっている。見学者がいるときには、建物外部にも兵士が歩哨として立つが、普通は、監視カメラによる相互監視を行うだけ。

ちょうど、北朝鮮の見学者が来るので、北朝鮮兵士が歩哨に立っていて、室内から 2 人が見えた。痩せた小柄の兵士だ。室内では撮影が許されているので、兵士の写真も撮る。対峙する国連兵士は、韓国兵とアメリカ兵でサングラスをかけている。隔てるものの無い至近距離の歩哨なので、目線が合ってならみ合いになるのを避けるために、サングラスが備品として支給されているとの説明。

次に、「自由の家」屋上の展望台から周囲を見学。たぶん特権的な見学者が帰ったので、北朝鮮兵士が 3 人、歩調をとりながら引き上げていくのが見える。ここでも、写真がとれる。

小型戦闘車の先導で、バスは「帰らざる橋」Bridge of No Return に向かう。途中で、展望台に寄り、北側の村を遠望。右手には、1953 年に停戦会議が開かれた建物も見える。車中から、1976 年に起きたポプラ事件の発生現場の碑を見る。軍事境界線が明示されず、板門店では北兵士と国連兵士が混じりあって警備にあっていた時代に、ポプラを切ろうとした北兵士とのトラブルで、国連兵士が死亡する事件が起きた。それ以来、境界線を明示し、双方兵士を隔離するようになったらしい。

帰らざる橋の手前へ進む。橋の中央が境界線だ。車の中から、見学と撮影をして帰路につく。先導の軍事車両と別れて、キャンプへ戻り、旅行社のバスに乗り換え、1 時間 10 分ほどで、ロッテ・ホテル駐車場に到着。同行の若い日本娘は、楽しかったと話していたが、当方は、複雑な気持ち。1910 年の併合がなかったならば、南北分断も起こらなかったのではないか？ 1950 年の戦争が起こらなかったなら、ドッジ不況で日本経済はどうなっていたのだろうか？

総合案内所へ歩いて資料をもらい、無料インターネットで元にhotmailで連絡、ソネット画面からの返信は日本語入力が効かず、英文で雲くんと睿さんに返事。

ロッテ・デパ地下で法酒、韓国もち菓子、朝食用パンを購入してから、明洞の焼肉店で、カルビ・タンの夕食。さすが本場の味。缶のマッコリ濁酒は、すこし甘い。帰宅して、高さんに電話するがまだ決まらないとのこと。

6・12 コンビニでコーヒーとジュースを買ってきて部屋で朝食。電話で仁寺洞にある旅館を予約して、地下鉄を乗り継いで移動。韓国伝統的旅館を経験しようというねらい。安国駅から路地を入ると、北京のフートンのような雰囲気。くねった狭い路地脇に寛勲荘旅館があった。3階建てでワンルーム・マンションのような部屋が@35000W。オンドルの部屋もあるようだが、まだ消毒が済んでいないというのでベッドにする。

景福宮に歩き始めると蒸し暑い。小さな店で扇子を売っていたので買おうとすると、松林堂という筆専門店、店主が筆を薦める。穂先が狼の耳の毛でできているという筆が書き味がいいので大小2本購入。50000Wで扇子はおまけになった。この扇子、あとで気づくと、made in Chinaの札が張ってあった。中国製品は、韓国にも進出しているようだ。ここ仁寺洞は、骨董通りと呼ばれるように、古美術商、古書店、紙筆文宝店、アート・ギャラリーが並んでいる。

まず、国立民俗博物館に行く。屋外に古い民家・商店のミニアチュアがある。屋根に塔のある建物が背景の山とよくマッチしているので写真を撮ろうとするとカメラが動かない。電池切れかと売店で電池を買ったが不調。接点が故障したらしい。展示は、先史時代からの生活史をジオラマで示したものが中心でなかなか良くできている。

キムチのビデオを日本語でも見られる。朝鮮半島の各地で、それぞれ独特なキムチを作っていて、その種類は1000を越えるようだ。ハングルの説明装置があり、母音と子音を組み合わせる表音記号ができることが良くわかった。

印刷の歴史の展示で、世界最古と説明された木版刷り経典があったが、日本の百万塔ガラニよりも古いのだろうか？金属活字も古くから使われているので驚いた。

ミュージアム・ショップで、塗り箸とハングルや朝鮮民話を模様にしたネクタイを購入。民話は、クマとトラが、神さまからヨモギとニンニクだけを食べていれば人間にしてやろうといわれたが、結局、クマだけが人間になれたというもので、ネクタイの模様は、クマ・トラ・ヨモギ・ニンニクと神様。ミュージアム・ネクタイは、日本の埴輪模様など、各国それぞれの特徴があって面白い。

次に景福宮を回る。日本統治時代に破壊された建物は復元されて李氏朝鮮建国の李王の宮殿の壮大さを感じさせるが、残っていた最大の木造建築勤政殿は修復工事中だった。雨で濡れる建物・回廊・中庭は、参観者も少なく、ひとときの風情だった。背景の北岳山も霧が巻いて良かった。

国立中央博物館は3層建てで、2階に先史時代からの歴史的遺物の展示、1階は陶磁器、地階は仏像・金属製品・絵画などとなっている。陶磁器展示は、さすがに充実して、青磁・白磁・粉青沙器の逸品が数多く並ぶ。仏像では、半跏思惟の菩薩像が目玉。広隆寺のミロク像の原型のような国宝83号はじつに素晴らしい。中宮寺の観音像の小型モデルのような金銅仏も見事だ。ガンダーラ仏によく似た砂岩の仏像もある。ショップで絵はがきを購入。1セットが2000Wは、安い。入場料も700Wだから、文化費への配慮は高い水準だ。

仁寺洞に歩いて部屋に戻ってから、近くで遅い昼食。農家風の内装の店で韓定食を頼むと、キムチ・野菜煮物・イカ煮物・豆腐チゲなど11品のおかずにご飯。これで@6000W。辛いが美味しかった。部屋に帰って昼寝。

8:00開演の貞洞劇場に地下鉄で行く。民族芸能をアラカルト風に演じる観光客向け劇場で、今日の出し物は、器楽演奏・舞踊・歌唱・太鼓演奏・太鼓踊りなど7演目。パンソリが聞きたかったのだが、派手ではないからレパートリーには入れないのだろうか。楽器では琴が3種類あるのが

珍しかった。爪弾き型のほかに、弓で弾く型と棒ではじく型がある。棒はじき型は、6弦くらいで低音、ベースのような役割だ。

民族衣装の女性たちによるファン・ダンスや花踊りはとてもきれいだが、「よるこび組」を連想してしまう。小太鼓3つを立ち打ちができるように両脇・後に配して、そのなかで曲打ちする女性6組と大太鼓による女性太鼓演奏はなかなか見事。

終演後、ホールで出演者との記念写真撮影ができる。カメラの機嫌が良くなったので、美女たちとカメラに収まる。電光説明板の文字が、「常設公演」とあるべきところが「常説公演」となっていたのを教えると、感謝してくれてキーホルダーをひとつ進呈してくれた。

貞洞劇場への道は、本来2車線のところを1車線の一方通行にし、曲線路にしてバンクも設置した人間優先の道で好感が持てる。途中でテントがけに人が寝ていて横断幕が掲げてある。何が書いてあるか分からないが、ハンストのようだ。総合案内所の建物でも、赤はちまきの決起集会を見かけた。やはり、労働運動は活発な国だ。

帰宅してパンで夕食。高さんに電話したがまだ帰宅しておらず、あとで連絡できたが、工場見学は無理とのことであきらめる。法酒をあける。

6・13 早めに地下鉄で水原に向かう。地下鉄といってもソウル駅を過ぎてからは地上を走る。約1時間10分ほどで水原に着く。これだけ乗って、料金は1200W、初乗りは700Wだから、驚くほど交通料金は安い。沿線はほとんどが市街地化していて、方々で高層住宅団地が目につく。水原は、ワールドカップで有名になった地方都市。ここにある世界遺産の城郭都市、華城を訪ねると、名高い焼肉がお目当て。まず、案内所で地図をもらって、バスを聞く。ここも地下道で道を渡ってバス乗り場に行かねばならない。地下街があって、小食堂が並ぶので、ここで朝食をとる。海苔巻きとスープ、キムチ、タクアンのセットで@2500。海苔巻きは酢めしではなく、中にはハム・卵焼き・タクアン・キュウリ・ニンジンが巻いてある。日本の巻き寿司との関係はどうなっているのだろう、どっちが本家か？

バスに乗ったが、地下鉄で通った成均館大学のほうまできてしまった。運転手に聞くと、華城に行くと言うのでそのまま乗っていると、駅に戻ってきてから華城に向かった。循環バスの乗り場を間違えたらしい。郊外見物のバスだった。

八達門の案内所で華城の地図をもらって所要時間を聞く。目の前は急な石段が長く続き、最高地点まではかなりの登りだ。きれいなトイレに行くと、歯を磨き顔を洗っている中年男性が居る。石段のふもとあたりにはホームレスがたくさん居ついているようだ。この国でも、ホームレスは多い。ソウルでも方々で見かける。物乞いも、道路や地下道階段などでときどき見る。

意を決して石段を登り始めるが、蒸し暑く、かなりきつい。華城は、18世紀に築かれた城郭で、東側は平地に土塁を築いて門や楼を造った平城風、西側は八達山に石垣を廻らした山城風になっていて、周囲は5.7kmある。

ところどころで写真を撮りながら休んで、南砲楼、西南暗門、西舗楼、西暗門と過ぎて西将台へ到着。ここが最高地点で、将軍や王が采配を振る場所になっている。この先には、これまでのような整備された歩道が無く、山道を下るようになっていて標識もないので、黄色いベストを着けた人にたずねるが、言葉は通じない。案内するというらしいので後をついていくと、どんどん山道の階段を下る。着いたところは華城行宮だった。1000Wチップをあげてガイドと別れる。新しく建てられた宮殿で、16日から始まる水原文化祭の準備が進められていた。

城郭に沿って下りたかったのだが仕方が無い。街中を華西門まで歩く。巻貝を思わせる形の防衛門で地図の写真より小さかった。ここからまた城壁に登って、平坦な道を北舗楼、北西砲楼、北西敵台、長安門、東北砲楼、華虹門と歩く。長安門は八達門に対する北の大門だが、朝鮮戦

争時に破壊されて再建されたもので、八達門だけが国宝になっている。華虹門は、川をまたぐ形に造られた門で、下の石橋のアーチから水が流れ落ちる姿が美しいと説明されていたが、今は水量が少なく、迫りに欠けている。城壁の上から見ると、レンガ建ての立派な1戸建ての個人住宅が並んでいる。木造住宅の国ではないようだ。

かなりくたびれたので、名物カルビの昼食を華虹門近くの漠布カルビでとる。明洞では味付けカルビを食べたので、ここでは生カルビを注文。15cmくらいのアバラ骨に20cmくらいの薄切り肉が巻いてある。木炭型に成型したコークスが燃料で、網焼きスタイル。大きな鉄で切りながら焼いてくれる。和牛に比べるといまひと味という肉だが、美味しい。付いてくる小鉢は12種類。薦められたので冷麺をひとつ追加する。さっぱりした味は、カルビのあとによく合う。食後には、砕き氷を浮かべた梅ジュースとスイカ。支払いは60000W。

バスで駅に戻り、案内所で利川への行き方を聞いてから、ロッカーのバッグを取って、長距離バスセンターまでバスに乗る。水原市のバス交通は縦横に発達していてバス停にははっきりなしにバスが来る。路線ごとに区分された乗り場ではないので、乗客は来るバスの番号をみて手を振る。

陶器の里、利川には鉄道は通っていないので、長距離バスで行く。高速道路は使わず、約1時間半ほどで到着。案内所を探したがどこにもない。「地球の歩き方」ソウル版だけが頼りの旅なので、案内所が無いとお手上げだ。温泉があるはずというが、見当がつかない。やむを得ず、目についたホテルに歩く。近づくとHotelではなくてMotelだった。ここではMotelとは、簡易ホテルを意味する。41000Wでツインに入る。ロビーに日本語の案内パンフレットがあった。たしかに、温泉のあるホテルもあるようだ。山登りの後の温泉は効いただろうと残念がっても後の祭り。世界陶芸祭りなども開催する市なのだから、バスターミナルに案内所くらい置くべきだ。

昼食が重かったのと、大遠足の疲れで、そのまま就寝。

6・14 バスで陶芸の里に行く。海剛陶磁美術館は、青磁を再現して人間国宝になった海剛が建設した美術館で、古陶磁器のコレクションと海剛記念室がある。青磁から白磁に進む中間期に現れた粉青沙器は、日本の三島につながる事が分かった。

秀吉の侵略で疲弊した朝鮮では、青磁の伝統が継承できなくなって技法が絶えてしまったのを、海剛が復興させたと案内の女性が説明。朝鮮美人だと思っていたら、日本人で、結婚して7年ここに住む人だった。海剛1代目を継ぐ2代目と若い3代目の作品を展示即売している。2代目の湯のみ茶碗2客と海剛作品の絵はがきを購入。

外の登り窯を見る。10mくらいの比較的小型の窯が、4基並んでいる。松薪が次ぎの火入れのために積んである。丈が低いので、製品の搬入搬出は苦労だろうと思った。

日本女性が紹介してくれた食堂正一品で、韓定食の昼食。石釜で炊いたご飯は、茶碗に移した後、おこげにお湯をかけて食べる。ここらは米が美味しいとの評判がある地帯で期待したが、日本米ほどではない。おかずは22種類で、イシモチの干物とタチウオの焼き物、焼肉、豆腐チゲ、茶碗蒸しが主菜で野菜の煮物やサラダ、和え物、漬物など。@9000Wだから安いし、栄養バランスが良い。サラダに付いていた太い唐辛子をかじったら辛くなかったので半分ほど食べると、辛味が強くなり、何回も水を飲んで舌を洗い流すはめになった。キムチなどの辛さには慣れてきたが、この唐辛子には降参だ。

隣の松坡窯売店をのぞく。曹(に似た字)利鉉の作品で、曜変を創り出せる腕前。なかなか見事な作品だ。青磁のなかにイチヨウの葉のような曜変が浮いている中くらいの壺が気に入ったが、150万Wなのでパス。湯のみ2組を購入。

バスでターミナルへ戻る。男生徒が席を譲ってくれた。水原の小学校に1980年代に建てられた孝忠碑があったが、儒教的な道德教育が行われているのだろう。

利川の中央市場をのぞく。薬種・野菜・鮮魚・肉売り場とスーパーがある。価格は日本に比べてかなり安いと恵子が言う。イカとタコ、貝類が豊富だ。市場の周りには、ニンニクの皮を剥いたり、青菜を1枚1枚そろえたり、ならべた青菜・青葉に水をかけたりしながら野菜類を売るオモニたちの露天の小店が並ぶ。肉屋の前にはバーベキュー炉が置いてあり、肉を買った人がその場で焼いて食べている。チキンや練り物を揚げて並べる店、などなど、賑やか。

ソウル行き高速バスに乗る。バスターミナルのはずれに高速バス乗り場があるのを見つけるまでがひと苦労。日本語はもちろん漢字・ローマ字表記もないので、道路標識にあったのを写して書いたソウルというハングルをたよりに、ようやく発車場所と売り場を見つける。ソウルまでは1時間ちょっとかかるが、料金@3300Wは驚くほど安い。

3:00に発車したが、ターミナルから出てしばらくは大混雑。高速道路も車の数は多い。走っているのはほとんどが現代・起亜・大宇の国産車で、たまにジャガーなど高級輸入車を見るが、日本車は見かけなかった。ソウル近くになると片側4車線のアメリカ並の道路となり、沿道には、高層住宅群が目立つ。ソウル・ターミナル近くでは右路線に次々にバスが寄ってきて、見たこともない壮大なバスの車列になった。

ターミナルは広大で、多分、北京の長距離バスターミナルよりも大きい。降りてから地下鉄まで165mという表示がある。途中で地下街に下りると、小さい衣料品店がものすごい数、並んでいる。人ごみの中、カートを引くのが気がひけるほどの混雑だ。ハルビンの地下街も大きく衣料品店が密集していたが、ここのは店舗も道幅もひとまわり小さく、それだけに繁盛している感じだ。

3号線をP329で1号線に乗りかえる。地下鉄駅には路線毎に番号が付いていて分かりやすい。バスターミナル駅は3号線のP339で、乗り換えの鐘路3街がP329、降りたのが市庁・City Hallで1号線のP132という具合。Pの意味は不明。

まず手近かのプラザ・ホテルに行くが、特1級だけあって@27000Wと高い。元が薦めてくれたウェブサイトで見たときにはプレジデントが1万円と出ていたが、いまさらネットで予約も面倒。特1級は身分違いとあきらめて、1級のBest Western系のニュー・ソウル・ホテルに@10600Wで投宿。バスローブもあってまあまあ部屋。

ビジネスセンターのパソコンで元にメールを書く。有料だがまけてくれた。

夕食は、ビビンバとオックス・テール・スープ。ビビンバは初めて食べるが、なかなか美味しい。スープはニンニクがきいていて、恵子は敬遠。ビール共で、18000Wと安い。小鉢は4種類で、空いたらお代わりをくれた。セブンイレブンでアイスクリームを買って帰る。辛い料理のあとの冷たい甘さはとても良い。

6・15 傘を持って散歩に出る。徳寿宮を目指して道路横断を試みる。片側6車線をかなりなスピードで走ってくる車の切れ目を狙う。早朝でもバスは多く、乗用車も走っているから、結構スリリングだった。車道が幅広いことが、横断歩道を作らない理由ではあろう。されば、地下道のエスカレータを整備しないと弱者いじめの人間軽視になる。

徳寿宮は9時開園で、大漢門は閉まっていた。帰りは地下道を通る。ホームレスがたくさん寝ているが、荷物はほとんど持っておらず、寝床もダンボール1枚。終電に乗り遅れて泊まっているような格好だが、風体は明らかに浮浪者。昨夜はみんな地下道のテレビを楽しんでいた。

朝食用の饅頭でもないかと探したが見当たらず、コンビニでカップ麺・粥を買って帰る。

朝食後、歩いて徳寿宮に。宮殿の建物、石造殿の中の宮中遺物展示館、徳寿宮美術館をみる。朝鮮王朝最後から2代目の王の宮殿で、現存建築物は少ない。白木造りの昔御堂が良かった。

遺物は、そこそこだ。御璽を王寶と呼び、握りは亀の彫刻になっている。美術館には近現代の絵画などがある。良元の馬の墨絵が良かった。庭には大きな瓶にスイレンが植えてあり、もう花を咲かせているものもある。

一回りして大漢門に戻ると、伝統武装の衛兵が2人立っていた。付け髭だがなかなか強そうに見える。衛兵交替の儀式もあるらしい。

タクシーを拾って独立門へ。黒塗りの優良タクシーで4000W。日本からの独立の門かと思ったら、清国に対する独立意識の表明のために建てられたようだ。恵子が監獄があるはずだということで、案内図を見ると、3・1記念碑と刑務所歴史館が書いてある。

歩いていくと1919年3・1、万歳運動の碑があった。宣言書を刻んだ石と志士の像。人名や人数は判らないが、激しい弾圧を受けたはずだ。

左手を行くとレンガの塀が見える。西大門刑務所歴史館があった。1945年後もソウル刑務所として使われ、移転した後に、日本帝国主義の事跡として残され、歴史館になった。赤レンガの監獄棟が4棟残されている。3つの2階建て獄房棟が45度に展開している。のぞき窓と信号棒のついた独房が片側30房くらい並ぶ。30×2列×2階=120房、これが12棟あったというから、1440房。集合獄房もあるからかなりの収容力だ。

懲役囚の強制労働工場も1棟残る。らい病囚など隔離監房も。そして、死刑場。小さな建物の中に絞首場と立ち合い人席がある。13階段ではなく、小さな椅子の上に絞首綱が下がっている。そのまま床が落ちて執行されるようだ。地下からの死体搬出口があり、裏手の丘に搬出用トンネルが掘ってある。刑場入り口のポプラの前には、執行に連れてこられた死刑囚が、ここで最後に泣いたと書いてあった。

裁判を経ての死刑ではあるが、やはり、アウシュビッツを想起せざるを得ない。刑事犯とともに政治犯が数多く処刑されたに違いない。重い気持ちで歩くレンガ道に説明板があり、レンガの丸京マークは、懲役囚がここで焼いたレンガだと判る。ますます足は重い。

木造の建物がある。女性囚の監房で、地下房になっている。3・1独立運動のときに、朝鮮のジャンヌ・ダークといわれた柳寛順が、最後まで抵抗して、拷問のすえ殺された場所だという。

中央の建物に入ると、資料館で、死刑判決文の展示。急に日本語の説明が聞こえてきたので振り向くと、女子中学生らしい2人連れが、説明員に案内されている。修学旅行の個別行動だろう。ここを見学するのは、ドイツ人がアウシュビッツを見学するのと同じように、歴史教育には必要だ。

2階は、日帝への抵抗の歴史をジオラマや実物模型で示す。3・1運動の投獄者が、獄房で「万歳」を繰り返し叫んでいる。「万歳事件」と呼ばれる運動で、武装蜂起ではなかったことが判る。地階へ入って驚愕。拷問シーンの模型が各種続き、女囚が爪に竹串を刺される場では、動きと悲鳴が再現される。逆さ吊り、鞭打ち、殴打も悲鳴が聞こえる。傍らには、机に脚をあげてのんびり構える日本官憲の人形。ここまであの日本の女子中学生に見せるのだろうか。

名古屋刑務所のリンチ事件が今もあるのだから、ここの展示は誇張ではないだろう。しかし、これほどのリアリズムは、アウシュビッツや東独の収容所記念館、中国の抗日記念館、9・18歴史記念館でも見たことがない。子供のころ、今の環7と13間通りの交差点に在った交番に連行される朝鮮人が、「アイゴー、アイゴー」と泣き叫んでいた記憶がよみがえる。気持ちの重さは最高になった。

フーコーが描くまでもなく、権力は非情な暴力装置としての監獄を必要とする。ヨーロッパの古城にも拷問用具は不可欠だ。一般論としては当然の事柄だが、日本近代がおこなった歴史行為と

もなると、一般論で納得することは不可能だ。過去にばかりこだわらずという日本の政治家は、この刑務所歴史館でなにを感じるのだろう？

地下鉄で鐘路3街まで乗って、雨の中、タブコル公園に歩く。3・1記念碑と十重の仏塔がある。記念碑は宣言書と主導者2人の立像。湿気でカメラはまた動かなくなった。

雨なので、宗廟見学は中止して、地下鉄で千戸駅まで行って、現代デパートで昼食。オープンの食堂で、韓国モチの辛味煮込み・チジミ2種・練り物の串・おでんを試みる。まああの味。

隣のEマートで、韓国海苔・辛子メンタイと焼酎2種とマッコリ酒を購入して帰室。マッコリ酒を飲んでひと休み。1200mlのマッコリ酒は@1600Wで、ホテルの水ボトル1本より安い。

夕食は、SFC、Seoul Financial Centerの地下の民俗酒場に行ったが日曜で休み。ロッテ・デパートへ歩いて、朝食用のパンを買ってから、11階のレストラン街へ上る。いろいろあったが、ユッケが食べられる店に入る。味付け済みの生牛肉刻みは美味しかった。米入り豆スープと焼酎(真露)で35000W。

6・16 光化門へ散歩。勘違いして90度違う方向に歩き、鐘閣駅近くに行ってしまった。引き返して李舜臣將軍銅像から門へ。景福宮の入り口が光化門だった。別に門が在るのかと思ったが、これなら先日見た。途中のアメリカ大使館付近には、機動隊員が集まっている。3日前、女子学生轢死事件への大抗議集会が行われたためだろう。起動隊員は若くて背丈が揃っている。痩せ形が多く、あまり強そうには見えない。刀より長い警棒を持っている。木製ではなく、グラスファイバーか硬化ゴムで、鍔が付けられるようになっている。小型の盾を持つ者もいる。一昨日は、東亜日報の社屋前に、警護集団が配置されていた。

フォーションのパンとホテル備え付けのお茶で朝食。横断地下道のおかげで脚がはっている。足裏マッサージの本場だから頼んでどうかと恵子が薦めるが、まだマッサージにはかかったことがないのでパス。

10:30 チェックアウトしてエアポート・バス乗り場に歩く。来たバスに乗ろうとすると、運転手がお金が足りないという。恵子が計算してバス代だけウオンを残したはずが、料金7000Wを700円と見て、勘違いし2000Wを残したのだ。慌てて銀行で1万円を両替して、次のバスで空港へ。チェックインしたが、荷物の事前検査はしないのが不思議だ。預けてからコンベヤーの途中に検査装置があるようだが、入国時の厳しさに比べて、これは呑気過ぎる感じだ。免税店より安いという空港売店で蔘鶏湯パックの買い物。たしかに出国検査後の免税店より安かった。水冷麺とビビン冷麺で韓国料理最後の昼食。

NK1930に搭乗しようとする、なぜか席をグレードアップしてくれて、ビジネスクラスに納まる。食事はまあまあな献立だが、鶏肉煮込みはかなり辛い。韓国のコックは辛くなければ料理ではないと思っているに違いない。ワインを2杯、ウイスキーとブランディを楽しむうちに、1時間55分で成田着。

ご機嫌で入国手続きに向かうと、途中のサーモグラフィー係りに止められた。真っ赤な顔で、表面温度が37度だという。「飲んでますね」と笑って通してくれたが、恵子は笑いがとまらない。「引かかるのじゃないの」という予言が的中したわけ。これが中国帰りだったら、もう少し検査されたかもしれない。

日暮里からの山手線では、青年が席を譲ってくれた。よほどくたびれて見えたのか、ともあれ、日本の若者も優しさを持っていることを実体験。最後まで良い旅だった。

7:30、帰宅。2003年韓国の旅、無事終了。

